

【論文】

ハーンの言語観と英語教育

西川 盛雄

[1] ハーンのコスモロジー

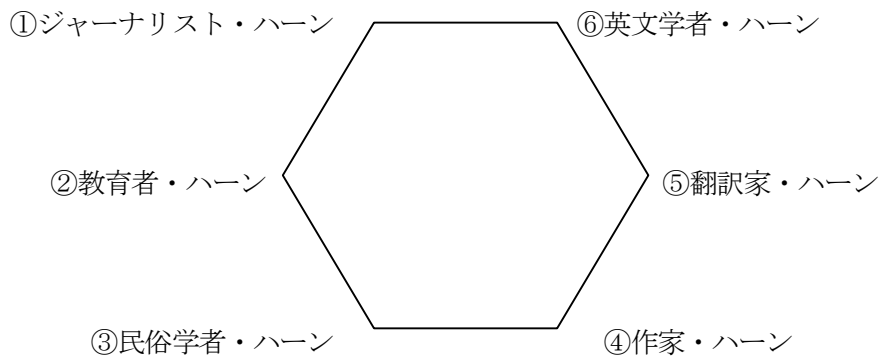
ラフカディオ・ハーン（1850~1904）の特徴の一つは彼の多面性にある。彼をよく理解するためには彼の多面性を複雑系あるいはコスモロジーとして理解しておきたい。彼の半生は幼少年期や青年期において厳しくも不条理な経験を多く余儀なくされる。仕事らしい仕事は渡米後シンシナティに来て印刷屋のヘンリー・ワトキンと出会い、彼の紹介でやっと寄稿するチャンスが与えられるところから始まる。

ハーンの多面性（コスモロジー）を考える上で、一つ目のパラダイムはジャーナリスト・ハーンである。彼はシンシナティ、ニューオーリンズ、神戸において有能なジャーナリストとして活躍し、記念碑的な時局の記事や文芸あるいは科学の評論記事を多く書き残した。二つ目は英語教師（教育者）ハーンである。明治維新以降、開国精神をもって近代化していく日本は教育という場を通して有為な人材を育てることが不可欠であった。ハーンは松江と熊本でそれぞれ島根県尋常中学校、第五高等中学校でネイティブ・スピーカーの英語教師として斬新な授業を行い、有為な学生を多く育てたのであった。三つ目は民俗学者・ハーンである。元来路傍の祠を愛し、松江では神社仏閣を訪ね、護符を集め、装飾豊かな日本の煙管を収集していた。また、ニューオーリンズではクレオール語の小俚諺集『ゴンボ・ゼーブ』やクレオール料理のレシピを集めた『クレオール料理』の本を出版している。四つ目のパラダイムは作家・ハーンである。彼は『チタ』や『ユマ』などのクレオール文学やゴースト（霊）の世界を扱う『怪談』などの再話文学を今に遺してくれた。それはケルト、クレオールの風土に馴染んでいたハーンの心の軌跡であった。五つ目は翻訳家・ハーンの立ち位置である。19世紀後半のアメリカは南北戦争で荒廃し、ヨーロッパに太刀打ちできるだけの文学の芽生えは少なかった。当時世界をリードしていたのはフランスの作家たちであった。彼はフローベール、モーパッサン、ボードレール、ゴーチエなど当時のフランスの有力な作家の作品を英語に翻訳してアメリカに紹介したのであった。六つ目のパラダイムとして東京帝国大学で行った講義録をみると、英文学者・ハーンの側面が浮かび上がる。英文学史や英詩分析に関わる韻律論や比較文学的視点の論考などは当時にあっては啓発的なものであった。

さまざまな試行錯誤を重ね、時間の経過とともに培われたものであったにしても、同じハーンという一人の人間のなかに蓄積され、内在化されていった多面性は優れて特徴的なものであった。その多面性を以下のように図式化することによってハーンという存在の知のコスモロジー

一の断片を理解する契機になることは間違いないであろう。

L. Hearn の多面性



[2]三冊の基礎文献

さて、前章で述べたことを背景にして、本稿ではハーンの教育者の側面に焦点を当て、ハーンがどのような英語教師であったかを掘り下げてみる。具体的には松江時代と熊本時代に行ったハーンの英語の授業に関する復元ノートの分析によって彼の英語教師としての実像を浮かびあがらせることになる。そのための主たる資料は以下の三冊のテキストである。

①アラン・ローゼン/西川盛雄 (2011 4/25) 『ラフカディオ・ハーンの英作文教育=*Lafcadio Hearn's Student Composition Corrections*=』 弦書房

②富山大学附属図書館ヘルン文庫/平川祐弘 (監修) (2013 3/31) 『ラフカディオ・ハーンの英語教育=*Lafcadio Hearn's English Lessons*=《友枝高彦・高田力・中土義敬のノートから》』 弦書房

③平川祐弘 (編) (2014 10/25) 『ラフカディオ・ハーンの英語クラス=*Lafcadio Hearn's English Class*=《黒板勝美のノートから》』 弦書房

①は2004年に熊本県立図書館で見つかった松江時代のハーンの二人の生徒（大谷正信と田辺勝太郎）の添削ガラス乾板の復元である。②は富山で見つかったかつての五高生友枝高彦のハーンの講義ノートであるが、これがかつての教え子高田力が後に書き写し、さらに戦火による焼失を免れるために北星堂の初代店主の中土義敬がこれを書き写しておいたものである。③は東京大学で見つかった五高時代のハーンの教え子黒板勝美が書き記していたハーンの講義ノートである。

[3] ハーンの言語への関心の動機

ハーンが言語の問題に真摯に向き合う契機について概略触れておかなければならない。たとえばニューオーリンズ時代を中心に、“A French Translation of Edgar Alan Poe” (*The Item*, 1879) の記事があり、19世紀後半のフランス文学の英語への翻訳（モーパッサン、フローベール、ゴティエら）、たとえばフローベールの *The Temptation of St. Anthony* (1910) (『聖アントワヌの誘惑』) に際しては元の言語 (source language) から目標とする言語 (target language) への写像 (マッピング) のプロセスでは最適な翻訳語の模索あるいは推敲の問題が大きく絡む。

また、ニューオーリンズやマルティニクなどにおけるクレオール言語との接触においては異言語間の接触・混淆の結果として言語の変容の問題が重要な課題となってくる。事実クレオール俚語の小事典であるゴンボ・ゼーブ『*Gombo Zhébes*』(1885) の発刊においては六つのクレオール地域（ルイジアナ、ハイチ、仏領マルティニク、トリニダード、仏領ギアナ、モーリシャス）から集めた俚語のクレオール語、フランス語、英語による三層の翻訳併記を行っている。さらに自らのクレオール文学の著作にもクレオール語が見られることも看過できない。

また、ハーンが書く記事、小説、紀行文、書簡などの文章作成における「文体」(Style) への関心は最適な言語表現を求めて表出と理解の問題を考えざるをえない。とりわけハーンは推敲を念入りに何度も重ねる表現者であった。

また、松江や熊本では英語の教師であったが、授業で生徒に課した英作文を具体的に添削するに際して、英語文法の正確さやイディオムなどの表現の妥当性をめぐって思いを巡らしていたはずである。恐らく日本人が外国語である英語の獲得において、ハーンがすでにニューオーリンズ時代に読み、記事にもしていたフランスの言語学者ミシェル・ブレアル(Michel Bréal) (1832~1916) の言語観に影響を受けていたことは興味深い。

ハーンは英語の授業に関して、松江では生徒の書く少し「おかしな」英語の添削を行い、これに適切なコメントを添えて返却していた。そのうち大谷正信と田辺勝太郎の二人の生徒がハーンが添削した自分の英作文を残してくれていたのである。また、熊本では五高生だった友枝高彦、黒板勝美がそれぞれハーンの講義ノートを書き写してくれていたことはすでに述べた。英語教育は言語教育の一環である。これを行う教師の側は言語をどう捉えているかという問題は重要である。ここで、ハーンは来日前にニューオーリンズで書いていた記事を通してどのような言語観をもっていたかについて述べておきたい。

[4] ハーンの言語観

彼は言語学者ではないが、ジャーナリストとして当時の西欧言語学の動向には少なからざる関心をもっていたことが窺える。

19世紀の言語学は歴史主義の時代であった。その学問的基盤を支えていた考え方は言語の歴史と進化(変容)を主軸とする Philology (言語学) であった。原義は学問(-logy)を愛する (*phil(o)*) ことであった。これは etymology (語源学・真実 (*etumos*) の学問(-ology)) と並んで学問の根幹の精神に関わっていた。そしてその成果はOED (オックスフォード英語辞典:1884年刊行開始)に集約されるように辞書記述の歴史的・文献学的正確さが目標であった。この言語学の思潮の中でフランスのミシェル・ブレアル (Michel Bréal) は異才を放っていた。ハーンはこの言語学者の引用を多く用いている。以下はハーンが言語に関わったニューオーリンズ時代に『タイムズ・デモクラット』紙に書いた言語に関わる論説 (articles) である。

- (1) “Notes on Creole Proverbs of the West Indies” (*TD:: The Times Democrat*) --- (1882, 12/31)
- (2) “Science and Education” (*TD*) --- (1884, 3/11)
- (3) “The Mental Dictionary” (*TD*) --- (1884, 11/16)
- (4) “Use of the Eye or the Ear in Learning Languages” (*TD*) --- (1885, 4/11)
- (5) “A Language Question” (*TD*) --- (1885, 5/16)
- (6) “Missionaries as Linguists” (*TD*) --- (1885, 9/13)

これらの論説からは次のような点が抽出される。

- 人間の進化における自然法則 (natural law) により、言語獲得においては The Eye (文字) より The Ear (音声) の方が優先される。つまり「話し言語は音声による概念伝達の原初的媒体である」とする。したがって出来るだけ多く音声による理解を具体的に進めることが望ましい、とする。
- 「言語は “Mental Dictionary” の保存が前提となり、<内なる辞書>の働きがある。そしてこれは「脳という素晴らしい館に保持されている」とする。つまり語や語結合上のルール (文法) や慣用句は頭のなかの辞書に記憶として内在化され、それを活用して妥当な言語の表出や理解が可能になるとするのである。
- ものには源があるが語にも源 (語源) があり、謂れがある。言語を学ぶ上でこの語や成句の源を知ることの重要性を指摘する。そして謂れが異なれば同じ綴りや発音でも「意味」が異なって用いられる、とするのである。これは同音 (綴) 異義や同義語の問題にも繋がる。たとえば、ハーンは “key” は「鍵 (かぎ)」に加えてピアノの「鍵 (けん)」になったり、楽器の「主調音」になったりする旨述べている。
- 宣教師たちは見知らぬ国や地域で見知らぬ言語と出合い、これを克明に記述して発音

や語彙や文法を記述して後世に知的遺産として残してくれた。この営みは方法論的には言語学者のそれであり、その貢献には大きなものがあった。

[5] ミシェル・ブレアル (Michel Bréal)

ここでハーンが影響を受けたM. ブレアルの言語観を Dover Edition (1964 版) からの引用文で確認しておきたい。ちなみにこのブレアルは現代言語学でも重要な用語である「意味論」(semantique / semantics) の創案者である。

彼は言語を対象となる物 (object) ではなく、生き物 (living things) と考えていた。生き物である限りにおいて生誕と結合と消滅のサイクルがある。そして次の世代への継承あるいは増殖が伴う。そしてダーウィンの影響のもとに生命体は適応による進化・変容が起ってくるとされる。Bréal の Dover Edition の引用によれば、

- “We have seen languages treated as living beings. We have been told that words are born, propagate, and die. (私たちは言語は生き物として扱われるのをみてきた。語は生まれ、増殖し、やがて消滅するものと言われてきた。訳出は筆者、以下同様)

現在では言語は一種の記号 (シンボル) として「意味するもの」と「意味されるもの」とのコンテキストにおける相対的な関係性の中で理解されている。機械的な「もの」(object) ではなく「いのち」ある生命体として理解されているのである。確かに長い年月とともに語や成句の意味や使われ方が変化するのみならず、語には一般意味論という情意的・評価的な意味合いも付着している場合が多い。ブレアルはまた同書で

- “How words are classified in the mind?” (語はマインドの中でどのように分類されるか?)

と問い、語はマインド (精神) の中で分類されているとしている。いはば、語はマインドという精神の場 (Mental Space) にある引き出しに整理され、貯蔵・保存されているとするのである。ここですでに言語の<棲み家>は精神というメンタルな場であり、言語表現と理解に際してはダイナミックなメンタル・プロセスが大きな役割を果たしていることを主張しているのである。これは現代の認知言語学に通じるものに他ならない。ブレアルは言語の表現と理解を一瞬のうちに行ってコミュニケーションを果たすのに内なる語彙 “interior vocabulary” の活用によることを次のように述べている。

- ・“We have the interior vocabulary, but we are so habituated to consult it and make our consultation so rapidly. (私たちは内なる語彙をもっている。しかしそれを参照することに習熟しており、しかも一瞬のうちにそうする。)

一般に、言語能力とは表現者が発した表現を、表現としての妥当性があるかどうかを自らチェック（点検）することのできる能力である。もし出来なければ<おかしな>表現を発していてもそのおかしさを自らチェックすることが出来ない。

実はこの原理は外国語（ここでは英語）獲得過程において重要な役割を果たす。ハーンが生徒の書いた英文の添削を行い、訂正やコメントを書き加えて行く過程は生徒にこの言語能力獲得の重要さに気づき、努力の励みにしてもらいたいためなのである。

次にハーンによる生徒の英文添削の具体的な事例について検討していきたい。

[6] 松江時代

ハーンは明治23年（1890）9月から翌年10月までの約一年間、お雇い外国人の立場で英語教師として松江の島根県尋常中学校と師範学校で教鞭をとった。受け入れた島根県の知事は籠手田安定であり、教頭は同じ英語担当の西田千太郎であった。西田は松江滞在中のハーンの面倒を公私にわたってよくみた。

松江時代のハーンの英語授業の実際をみる場合、当時授業を受けていた大谷正信と田辺勝太郎という二人の生徒が残してくれたハーンによる英作文の添削資料のガラス乾板（熊本県立図書館所蔵）を調べることが大いに参考となる。

ハーンは生徒に自由英作文というかたちで課題を与え、英語で自由に書くことを要求した。以下にハーンが生徒に与えた課題の主たるものを挙げてみよう。

> 自由英作文 (Composition) のトピック

- ・ [Birds] *The Hototogisu, The Owl, The Kite, The Uguisu (The name of Japanese singing bird)*
- ・ [Worms] *The fire-fly, The Centipede, The Japanese Spider*
- ・ [Animals] *The Tortoise, The Japanese Monkey, The frog*
- ・ [Plant] *The Botan, The Lotus,*
- ・ [Food] *Rice, Tea,*
- ・ [Festive Day] *Hina-matsuri, The birth-day of his Majesty, The weather of the 15th of January*
- ・ [Ware] *Lacquer Ware*

- [Sports] *Fencing, Wrestling, Swimming*
- [Landscape] *Lake Shinji, Boating On the Lake of Shinji*
- [Religion] *Ghosts, Composition (:Creator) , The Seven Dieties of Good Fortune, About Kasuga at Matsue, Composition(: Emperor)*
- [Person] *The greatest Japanese*
- [Sending a Letter] *To my father, To a Bookseller asking for a book*
- [Proverbs] *The fox who borrowed the Tiger's Power, About the little insects which fly to the lamps at night and burn themselves to death* .
- [Others] *About what I dislike, How did you spend this summer vacation? What is the most awful thing? Why should we venerate our Ancestors?*

これをみるとハーンが与えたトピック（課題）は生徒の生活に身近なものであるだけでなく、いかにも日本の伝統的な文化の粋を代表しているものである。これは、生徒にとっては親しみをもって書きやすく、先生の添削を通して大いに英語力向上の契機となる。他方、来日したばかりで元々アメリカで有能なジャーナリストであったハーンにとっては手っ取り早い格好の日本取材の方法となる。英作文を通して多数の日本人の生徒が日本のことを教えてくれるのである。

次に、ハーンの添削の事例をみってみる。

≫添削の事例：

1. agreeable は<人のマナー>については云えるが、<人の容姿>には用いない。したがって *agreeable woman は奇妙で、agreeable manner のような使い方が好ましい。（以下事例でアステリスク（*）のついたものは不自然な言い方を表わす。）
2. 生徒の書いた *other many games の事例に関して、語順は*other many ではなく many other とする。日本語では「他の多くのゲーム」の語順は良いが、「*多くの他のゲーム」の語順は少し奇妙である。
3. tasteful は artistic には用いるが、飲食物には用いない。例えば *tasteful dress* や *tasteful decoration* は良いが、*tasteful food/drink* は妥当ではない。
4. *furniture* はこれ自体で複数概念をもち、*furnitures とはならない。
5. rescue は他人を助けるためにのみ用いる。自分を助ける場合には用いない。（生徒の書いた*We will rescue ourselves. の文に対して。）

これらは英語学でいう「語法」（collocation）の問題である。外国語学習の目標は学習者が目

標とする外国語の話し手の言語学的直観を理解・獲得していくことであるが、実際には微妙な「エラー」を学習者自ら理解して訂正できなくてはならない。

他に生徒の書いた文の添削ではないが、教育者としてのハーンの立場から生徒を励ましたり、ユーモアを含んでチクリと叱っているコメントがあったりするのでここに記しておく。

- a. *Very good indeed! Do not be discouraged by your few mistakes. I think you will write English very nicely some day. Read all the interesting English books you can get.* (「とてもよくできました！少しぐらいの間違いでくじけないこと。そのうち英語をとてとても上手く書けるようになります。手に入る興味ある英語の本を全て読んでみなさい。」)
- b. *I hope you composed all this yourself;-- but it is so very good that I cannot help thinking you got one or two sentences out of a book.* (「君はこれを全て一人で書いたのだとは思いますがあまり上手すぎて、先生は君が何処かの書物から文を若干失敬してきたのではないかと思ってしまうのだが。」)

総じて松江時代の英語教師ハーンのスタンスは、①先生と生徒は人格的に対等であり、生徒と先生との心理的距離を縮めるタイプの授業を行っていた。授業に際しては先生に対して **Sir** と呼ばせることはなかった。②教授方法は後の英語教育の方法論の用語を用いれば **Direct Method** の **Q&A** 方式が特徴的であった。先生と生徒とのコミュニケーションにおいては一方向ではなく双方向的なスタンスを取っていたことは儒教精神が一般であった当時の日本にあっては特筆すべきことであった。③すでに触れたところであるが、自由英作文のトピック（課題）は生徒の日常生活に根差し、身近な生活の中から選んでおり、余計なプレッシャーを生徒に感じさせることはなかった。さらに、④日本に來たばかりのハーンには、松江で生徒に課した自由英作文の添削をするという作業は日本を取材する（知る）上ですこぶる好都合であったに違いない。

[7] 熊本時代

ハーンは松江に約1年滞在の後、明治24年(1891)11月に松江から熊本に赴任してきた。足は当時春日駅(現熊本駅)まで開通したばかりの列車であった。赴任先は明治20年に発足した第五高等中学校である。時の校長は第三代嘉納治五郎であった。ここでハーンの授業を聴き、克明にノートを取っていた生徒がいた。後に東京文理大学の教授となる友枝高彦である。この友枝の教え子で旧制富山高校の教授となった高田力が恩師の昔のハーンの講義ノートを借り、これを書き写すことを願い出て許された。時代は戦時下である。もしものことがあるとい

けないので、北星堂の初代社主の中土義敬がこの高田が書き写したものの貴重さに鑑みて、中土自らこれをさらに書き写しておいたのである。果して友枝のオリジナルなもの、高田の書き写したものは焼失したが、中土のものは難を逃れ、後に中土の遠縁に当たる富山の千田篤の発見を通し、当時富山大学客員特別研究員であったマリ・クリスティーヌがトランスクリプトと日本語への翻訳を試み、平成 25 年（2013）3 月に「富山大学附属図書館ヘルン文庫」と平川祐弘氏との監修のもとに日の目を見ることになったのである。

いま一つは、五高時代のハーンの英語授業に関してかつての五高生だった黒岩勝美のノートが東京大学で発見された。平成 26 年（2014）10 月に平川祐弘編、牧野美季解説によってその内容が出版されたがこれもまた五高生によって筆記されたハーンによる英語の講義ノートであった。

ハーンは五高においても生徒に自由英作文を課し、その添削を試みている。ただしその内容は大いに異なる。例えば以下はハーン作品「九州の学生とともに」に出て来る自由英作文のトピック（課題）である。

> 自由英作文（Composition）のトピック

- “What do men remember longest?”（人が一番永く記憶に留めるものは何か？）
- “My First Day at School”（はじめて学校へあがった日）
- “What is eternal in literature?”（文学における不滅なるものは何か？）
- “What is the most difficult to understand?”（最も難解なるものは何か？）

さらに以下のように明治 26 年（1893）の卒業生クラスに課した問題は何とも哲学的な内容をもったものであった。

- ---- Carlyle, having been asked by a student, “What shall I read? ---- “Read that which is eternal.” Comment upon this incident; and write your own opinion as to what is “eternal” in good books, ---- considering the word “eternal” as referring only to the whole history of human civilization, and its probable future.（カーライルは、学史から「何を読めばいいのですか？」と問われ、「永遠なるものを読みなさい」と答えた。このことについてコメントし、良い書物における「永遠なるもの」とは何かに関し、自分の意見を述べなさい。なおこの際「永遠なるもの」という語は、人類文明の全歴史、ならびに予想される未来について言及しているものとして考えなさい。）

この種の課題については数学のような唯一の正解といったものはない。そしてトピック（課題）の内容は松江時代のそれに比して抽象的で *sophisticate* されたものになっている。

次に友枝高彦、黒岩勝美それぞれのノートからハーンが添削した英語の事例を少しみってみる。

≫ 添削の事例(一) (友枝高彦ノートより (抄)) :

1. 時間(刻)と場所を規定する前置詞の使い方の図式的説明を与える。(例 *past* と *to*, *across* と *through* の理解のためにそれぞれに時計の図や空間のイメージ・スキーマを描いて解説している。
2. 語源(語の謂れ)の説明をコメントすることによって語の理解と関心を深めさせている。たとえば:
 - ・土用は何故 *Dog Days* なのか? ・天の川は何故 *Milky Way* なのか?
 - ・「港」の *port* と *harbo(u)r* の違い。(*port* には *harbor* と *town* の両方の意味が混じっているが、 *harbor* はもっぱら避難場所 (*shelter*) の意味を内包する。
 - ・日本語で同様の「祝う」の意味をもつ *congratulate* の場合は元来ラテン語で接頭語の *con-* (一緒に) と語幹の *gratulate* (喜ぶ) との合成であって、この動詞の対象(目的語)は「人」である。しかし *celebrate* はイベントや祝い事や節目の日の事業などを祝福する場合に用いて対象(目的語)は「人」ではない。
 - ・曜日それぞれの呼称 (*Tuesday, Wednesday, Thursday, Friday* など) は北欧(ゲルマン/チュートン)神話に出て来る神の名前にもとづくものでその謂れの説明をする。
 - ・ *Buckingham Nottingham Birmingham* の *-ham* は元来デンマーク語由来の語であるが、後にこれが接尾辞として機能変化を起こして用いられているものである。
3. 多義性について: *play*(遊び)は抽象名詞で複数形はないが同じ綴りでも *play*(演劇)は普通名詞でいろいろな戯曲で複数形を用いることをコメントしている。
4. たとえば *hat* と *cap* の違いのように、似て非なる二つの語(類義語)については図示することによってその違いを分かり易く説明している。
5. 「テーブルは木で出来ている」を英文にするに際して生徒は「木」は *tree* だから”*The table is made of tree” としがちであるが、*tree* とは生きている立木のことであるのでこれは誤りである。ハーンはここでもう一つの「木」である「材木」を表わす *wood* を提示して”The table is made of wood.” が正解であることを指摘する。
6. ハーンは 同音(綴)異義についてのコメントもわすれない。たとえば、*sound* には名詞(音)と形容詞(健やかな)、あるいは *fast* には形容詞(速い、固定した)と副詞(速く、しっかりと)など融通性をもって用いられていることを紹介する。

他にハーンは講義の中で、生徒に身近な昔話や民話を活用して、英語の使用法を教えている。たとえば、作品「夏の日の夢」(“The Dream of a Summer Day”)に出て来る「若返りの泉」の話も講義でも用いて前置詞の微妙な使用法の差異を教えている。また、鋸を引く時は日本人は手元に向けて引くが、西洋人は逆に向うの方に押すことを述べ、ものを書く時は筆書きのように日本人は肘を軸として書くが、西洋人はペン書きのように手首を軸にして書くことを述べ、東西の比較文化論を展開している。

▶ 添削の事例(二) (黒岩勝美ノートより (抄)) :

1. 「いろいろな」を表わす語で **several** を用いれば同じ種類のもの (**several games of football**)、**different** を用いれば異なった種類のもの (**different games of cards**) について用いられることを説明する。
2. **climb** はそれ自体で一般的に「登る」という意味であるが、**climb down** となると「hands を使って降りること」を表わす。
3. ここでも語源を知ることの大切さに触れる。たとえば **sublime** (高尚な、荘厳な) はラテン語の「高尚」を表わす **sublimis** に由来する、とコメントする。
4. 「貨幣」についてのコメントで、紙幣 (**paper-money**) には不可算名詞で複数形がない。しかし **coin** は可算名詞で複数形があることを指摘する。
5. 英語の **I have a family** は日本語では「私には妻子がある」の意味が主である。その否定形である **I have no family** は「私には妻も子もない。」という意味となる。日本語の「私には家族がない。」では妻子に留まらない点日英間に微妙なニュアンスの相違がある。
6. **shadow** は「影」を表わす一般的な用語であるが、似て非なる **shade** は「(物の) 輪郭」や時にはシルエットや亡霊 (**ghost**) の意味にもなる。
7. 音の形容に関して、高い(**high**)/低い(**low**) 強い(**strong**)/弱い (**weak, feeble**) に加えて、力強くて低い (**deep**)、甲高い (**shrill**) など多々あることを紹介している。

他にハーンは英語の仮定法「もし~ならば」を説明するために、小さな説話をもち出して理解と応用を図る。たとえば、ボートで川を渡ろうとしていた男の話として、「鷺鳥と狐を連れて男が穀物の袋をもって小さなボートで川を渡ろうとしている。ボートが小さいので一つだけしか持って渡れない。①もし狐を持って行くとすれば、男がいない間に残された鷺鳥は穀物を食べてしまうだろう。②もし穀物を持って行くとすれば、男がいない間に残された狐は鷺鳥を食べてしまうだろう。したがってこの二つを一緒には置いておけない。そこでどの順序で川を渡るのが最適か」という一種の知的ゲームを生徒に課するのである。こうして生徒は事例を推論

する中で仮定法 (if ~ then) の活用を学んでいくのである。>

また、ハーンによる英語の俚諺の紹介については若干ではあるが以下の通りテキストから引用しておきたい。

- High regions are never without storms. (高所には嵐はつきもの)
- The road to hell is paved with good intention. (地獄への道は善意で敷き詰められている。)
- Walls have ears. (壁に耳あり)
- When the Fox begins to preach, take care of your geese. (狐が説教し始めたら、鳶鳥を隠せ。)

さらに、ハーンは熊本時代の英語教師のスタンスとして松江時代と変わらない点は英語の授業に取り上げる素材の身近さである。たとえば、「水前寺」「阿蘇」「熊本城」「西郷隆盛」「瑞邦館」「秋月胤永」「霧島」など熊本や九州ならではの人名や地名が授業に取り入れられている。おそらく学生も英語という外国語を学ぶに際して身近な日本語の固有名詞に接して安心と喜びを感じながら学習できたのではないだろうか。

ちなみに日本の英語教授法の歴史でハーンが松江・熊本で実践していた明治 20 年代前半のころはまだ日本の英語教授法は確立される状態ではなかった。むしろ模索期として夏目漱石が明治 25 年 (1892)、若干 25 歳の時に書いた『中学改良策』が早く、ここで将来の英語教育の改善策を模索した。その後ロンドン留学から帰国し、帝国大学で教鞭を取り、さらにここを辞した後書いた論考に明治 44 年 (1911) の『語学養成法』がある。

それまでの文法・訳読中心の方法に対して、政府がイギリスから招聘したオーラル・メソッドのハロルド・パーマーの来日がやっと大正 11 年 (1922) であり、岡倉由三郎の『新英和大辞典』(初版) が出たのは昭和 2 年 (1927) だったことを思えば、ハーンの生徒との直接のやり取りに基づくオーラル・メソッド方式がいかに早い時期のものであったかが分かるのである。

[8] まとめ

ハーンは生涯において偶然に出合ったものを必然化しながらさまざまな領域で才能を発揮した。結果として私たちはその多面性において一つの複雑系としてハーンのコスモロジーを理解しようとすることができる。差しあたって①ジャーナリスト、②(英語)教育者、③民俗学者、④作家、⑤翻訳家、⑥英文学者の側面であるが、他にも挿絵画家、科学あるいは芸術・文芸の評論記事は多い。

本稿では(英語)教育者の側面に焦点を当て、主に松江時代と熊本時代にハーンはどのよう

な英語の先生であったのかについて具体例に基づいて少しでも明らかにした。その際松江時代については、生徒たちに課した自由英作文の課題のリストと、二人の生徒（大谷正信、田辺勝太郎）が遺してくれ、2004年熊本県立図書館で見つかったガラス乾板に複写・保存されていたハーン添削の内容を紹介した。また、熊本時代については、元五高生だった友枝高彦が書き遺したものを、これを書き写し、戦時下焼失を免れたハーンの講義ノートと、黒岩勝美が遺したハーンの講義ノートについての紹介を行った。そこにはニューオーリンズ時代に出あい、当地の『タイムズ・デモクラット』紙の記事に書いた19世紀末のフランスの言語学者ミシェル・ブレアルの影響を受けた彼の言語観について述べてみた。

ブレアルの考えにしたがえば、人間の言語獲得、言語使用（表現と理解）に際しては *Mental Dictionary* が精神（マインド）の中に内在化されていなければならない。言語は「モノ」ではなく意味の側にシステムの軸足があるからである。これは人間の推論のプロセスに関わって現代の認知言語学に繋がるものである。

また、人間は言語の外的な音声、文字の表層的分析だけではどうにもならず、むしろ深層にある意味構造の構築とこれを可能にするルール「記憶」に繋げて大脳の働きの解明が望まれる。これは人間の言語能力（*competence*）の実態を解明しようとする現在の脳科学に繋がるものである。

さらに、ハーンは言語を「生き物」の一種として理解し、生き残るためには混淆・変容が避けられず、最適性を求めてさまざまな進化の歴史が展開されてきたことを理解する。歴史を遡ることによって語の特徴が分かるのである。ここにハーンは語の歴史つまり語源（語の謂れ）を知ることの重要性を確信する。したがって、授業においても生徒に英語の語源の説明を熱心に行い、生徒の英語の学習意欲の喚起につとめているのである。そしてハーンは身近な文人の名を上げながら「外国語を知ることによって自国語に対する知識は広まり深くなる」ことを生徒に伝えるのであった。

[References]

- Bréal, Michel (1964) *Semantics—Studies in the Science of Meaning* (Dover Edition),
New York: Dover Publications.
- Hearn, Lafcadio (1885) *Gombo Zhebes*, Will H. Coleman, New York.
- _____ (1895) “With Kyushu Students” in Hearn (1912).
- _____ (1912) *Out of the East and Kokoro*, Houghton Mifflin Co. Boston and
New York.

- Hutson, Charles W. (ed.) (1926) *Editorials*, Boston: Houghton Mifflin.
- Mordell, Albert (ed.) (1925) *Occidental Gleanings Vol.II*, (Reprinted 1967) Books For
Libraries Press, Inc.
- Nakanishi, Yoshihiro (中西善弘) (1978) 「Linguist としての Lafcadio Hearn (Lafcadio
Hearn as a linguist)」 『へるん』 No.15
- Natsume, Sōseki (夏目漱石) (1892) 「中学改良策」『漱石全集』(第 12 卷: 1967) 岩波書店
_____ (1911) 「語学養成法」『漱石全集』(第 16 卷 1967) 岩波書店
- Nishi, Masahiko (1999) 『クレオール事始』 紀伊国屋書店
- Nishikawa, Morio (ed.) (2008) 『ハーン曼荼羅』 北星堂 (2006)
_____ (2006) 「ハーンの言語観(Hearn's View-point of Language)」『へるん』No.43
_____ (2012) 「ラフカディオ・ハーンの文体(Lafcadio Hearn's Literary Style)」
『ハーンのまなさし』 坂元昌樹、西槇偉、福澤清 (編) 熊本出版会
- Ozaki, Takashi (尾崎孝) (1978) 「ラフカディオ・ハーンの英語 (English of Lafcadio
Hearn)」 『へるん』 No. 43
- Valdman, Albert et al. (1998) *Dictionary of Louisiana Creole*, Bloomington: Indiana
University Press.
-